

27年度第1回盛岡まちかど森林教室の概要について

7月10日、全国的に見ても数少ない林業専門紙を発行している岩手林業新報社の酒井博忠代表取締役をお招きし、岩手の林業、木材産業について語っていただきました。林業関係者、木材産業関係者の皆さんの多数のご参加をいただきました。

普段であれば、白黒の紙面ですが、酒井社長からは、取材を通じて集められた興味深いカラー写真を沢山見せていただきました。また、NHKの番組ではありませんが、「ファミリーヒストリー」のご紹介もありました。もともと、お父様は愛媛県のご出身で、帝室林野局に就職され、盛岡がその任地だったこと、やや一本気な性格も手伝って帝室林野局を去ることになり、林業新聞を始められたこと、大学で林学を学ばれた長男（酒井社長のお兄様）が若くして亡くなり、日本文学専攻の酒井社長が家業（新聞社）を継ぐこととなったことなどについてお話しがありました。



林業、木材産業でお仕事をされている方でなじみがある情報源といえば、例えば「日刊木材新聞」が挙げられるのではないのでしょうか。「岩手林業新報も木材新聞の一つ」と勝手に考えておりましたが、酒井社長のお話では、林業、川上サイドに立って物事を見ているとのこと。林野庁・国有林は、丸太は1立米当たり百ドルが国際相場であり、それは所与のものであると諦めており、本気で丸太の価格を高くしようと考えない、その姿勢が問題だ、と厳しいお叱りをいただきました。我々国有林としても丸太の付加価値を高めて売るべく努力はしているところではありますが、岩手林業新報社におかれては、お父様の時代から、山側の応援団として、世の中の動きを見てこられたのだと思います。なお、岩手林業新報といえば、まず「硬軟 冗談版」から読むという読者も多いのではないのでしょうか。酒井社長のお話を聞いて、「本当は硬派の方だな」と強く感じた次第です。

森林管理署は様々な会合にお招きいただきますので有り難く思っておりますが、当然、限られておりますので、岩手林業新報は我々にとって重要な情報源であり、また、我々の取組も取り上げて下さる重要なパートナーです。今後も岩手の林業の発展のため、ひいては木材産業の発展のため、興味深い記事を沢山提供していただければと思います。

(文責：署長 清水邦夫)